【多摩丘陵･私の出会った生き物たち15】

＜オトシブミのゆりかご＞

桑原紀子

新緑の林を歩いていると、柔らかい緑の葉に、葉っぱで作った1センチほどの小さな巻物がぶら下がっているのに出会いました。

よく見ると同じようなのが、いくつか見つかります。葉の種類も色々で、コナラ、クヌギ、エゴノキなどの葉に付いているのです。

葉の種類が違うと、少しずつ、巻き方、ぶら下がり方が違っています。

巻物は、葉っぱの付け根部分を少し残して、残りを二つ折りにたたみ、クルクルと巻き上げてあるようです。巻き上げるだけではほどけてしまうので、仕上げに葉を折り返して、巻き戻らないように工夫してあります。

1センチほどの緑の巻物をこんなに上手に作ったのは、オトシブミという小さな虫で、甲虫の仲間です。葉っぱの柔らかい今の季節の、旬の昆虫です。

オトシブミって、誰がつけたのか、素敵な名前だと思いませんか？

オトシブミは、落とし文、つまり昔の人が恋文を巻紙に書いて、相手の通り道に落とした、ということから名づけられたそうです。

5月頃見つかるのは、葉っぱにぶら下げてあるのが多いのですが、6月に入ると、キブシ、クリなどの葉が巻かれて切り落とされた落とし文が、その木の下でいくつも拾えます。拾うと、ちょっと胸がどきどきして、なんだか開けてみたくなります。

ていねいに巻かれた葉っぱをそっとほどいてみると、葉っぱの先の方に小さな黄色い卵が一つくっついていました。

巻物は虫のいたずらでも、恋文でもなく、卵を包むオトシブミのゆりかごだったのです。

オトシブミには、ナミオトシブミ、ヒメクロオトシブミ、エゴツルクビオトシブミ等のいくつかの仲間がいて、体色も模様も体の大きさも、ゆりかごに使う葉っぱの種類も違います。ゆりかごに卵を一つ産み付けるのは共通ですが、同じ種類に偏らない様に、それぞれ好物の葉がある様です。写真家の今森光彦さんによると、母虫が葉に飛来してゆりかごを作り飛び去るまで、2時間あまりかかるそうです。

交尾、産卵、ゆりかご作りと、小さな虫には大仕事です。

卵からかえると、幼虫は自分のゆりかごの中で巻かれた葉を食べて蛹になり、成虫になって、中から穴を開けて飛び去ります。

昔キブシの下でゆりかごをひとつ拾って、4週間近くたったある日、すっかり茶色く枯れたゆりかごに穴が開き、中からウスモンオトシブミというのが出てきた時は、本当に嬉しかったです。ゆりかごは枯れても大丈夫な様です。

成虫も葉が餌で、食べ痕の小さな丸い穴がポツポツ残っている若葉を探すと、葉裏にいたりします。

一生の間ほんの少しの葉を食べ、何の悪さもせず、私にも真似のできない素敵な葉っぱのゆりかごをいくつも作るオトシブミを、私は新緑の林の主役と、ひそかに思っているのです。